

青春の情熱や憂愁を漢詩で表現した浪漫派詩人

なかのしろう

中野逍遙

漢詩人

一八六七年（慶応三）
一八九四年（明治二七年）

道情 情を言ふ

擲我百年命 我が百年の命を擲ち
 換君一片情 君が一片の情に換へん
 仙階人不见 仙階 人見えず
 唯聽玉琴声 唯 玉琴の声を聴く

〔意訳〕

私の百年の命をなげうっても
 あなたの小さな愛情に換えたい
 二階を見上げて、姿は見えない
 ただ、あなたの弾く、
 美しい琴の調べが聴こえてくるばかりだ



道情の漢詩碑（和霊公園）

中野逍遙（本名重太郎）は、慶応3年（1867）宇和島藩士・中野五郎の長男として生まれ、南予中学校を卒業すると大学予備門に学んだ。同期に夏目漱石、正岡子規がおり、下宿の近くには歌人の佐佐木信綱がいたことから交友を深め、詩を論じ、歌を語り合った。

逍遙は、佐佐木信綱から国文や和歌の指導を受けていた実業家の娘・南条貞子を見て熱烈な恋心を燃やし、その恋情を漢詩にした。しかし貞子は逍遙の想いを知らないまま結婚し、失恋した逍遙は28歳で病死した。

一年後、逍遙の才能を惜しむ人たちの手で遺稿集が出された。それはのちの抒情派詩人・島崎藤村に強い影響を与えて「哀歌」の詩を書かせ、田山花袋も「バイロンやハイネのような漢文の秀才」と小説のなかで称賛した。また詩人・日夏耿之介は「20代の浪漫的春愁を四角な漢詩に託して、却って新体詩以上の詩的エフェクトを示したことは異彩」だと評し、いふなれば逍遙は、遺稿集一冊で文壇に不朽の金字塔を打ち立てた。

逍遙の自筆原稿



中野逍遙

東京大学予備門

